

三年前の春 村の中学を卒業した友と僕

たった三人の同級生 紅一点だった彼女は一家で離村 残った僕ら二人は村外の高校へと進学した

奥武線は僕らのために早朝の列車を設けてくれた 夏には山の端から伝わる朝日の熱気とともに 冬は白銀に塗り込められた線路に前灯まぶしく出発する五時四十一分発の白河行き

そして毎朝小さな尻尾を振りながら僕らを駅頭で見送ってくれる犬駅長へ口は 他でもない彼女一家が残して行った忘れ形見だ…

貸し切りの赤い列車で伊南川に沿った渓谷を下る五十分は故郷の友との懐かしい時間 南郷についたら彼は六時三十六分発の只見行きに乗り換えて界の南会津高校へ 僕はそのまま列車に乗り続けて下原駅前の田島高校へ

帰りもいつも一緒だった 十七時十五分に下原を通る只見行き下り列車で僕が南郷まで来ると 向かいの木ムで発車を待つ三両編成にはいつも彼の顔が 界昭和口を十七時五十六分に出た三両の気動車は僕らの村へ向かう最終列車

それでもいつしかそれぞれ新たな友人ができ 気づけば行き帰りの列車も言葉少なに

この春僕は東京の大学へ 彼は郡山に仕事を見つけそれぞれ村を後にした

今頃は若芽が芽吹き萌黄色の命吹き出す頃だろう へ口は駅で尻尾を振って待っていてくれるだろうか…
竹馬の友ら三人で過ごした 幼き日の思い出を映すあの村で

ああわが愛しの 檜枝岐駅

